

論文

イングランドのミドルクラス向け女子教育と家庭科関連科目群

—マンチエスタ女子ハイ・スクールのカリキュラムと生徒層

一八九四—一九一四—

中 込 さやか

キーワード

女子ハイスクール カリキュラム 家庭科 生徒層

はじめに

一八九〇—一九一〇年代イングランドのミドルクラス女子を対象とした女子ハイ・スクールでは、教育人口の拡大により、それまで主流であった大学進学者をモデルとしたカリキュラムから、より大衆向けカリキュラムへの再編成が行われた。生徒の多様な将来に応じたカリキュラムを追求する中で、調理などの「家庭科」が導入されたものの、家庭に入る生徒や「低学力で、社会の下層に属する生徒」

に限定されて教えられてきたと言われる。<sup>①</sup>

この時期のイングランドでは、「家庭科」つまり「家庭管理と他の家事科」に類する科目は Domestic Economy、Domestic Science、Domestic Arts、Housewifery 等の異なる名称の下で、異なる教育目的や学習内容、履修者をもった。A. ターンブルはこれら科目の推進を「家事科運動 (Domestic Subjects Movement)」と総称するが、家事科 (Domestic Subjects) はイングランドの女子教育では一九一〇年代以降に普及しはじめた用語であり、本稿の

イングランドのミドルクラス向け女子教育と家庭科関連科目群（中込）

扱う史料ではごく一部にしか登場しない。よって、本稿では「家を拠点とした生産性、管理性、持続性のある営み、家の治め方、家の暮らし方等」に関する広範な科目、教育内容全般を、特別に「家庭科関連科目群」と呼ぶ。<sup>②</sup>

第二波フェミニズムの影響を受けて成立したイングランド女子中等教育史はフェミニスト的な関心を強く示し、改革パイオニアの女性教育者が知的な女子教育を確立するために腐心した様に焦点をあててきた。家庭科関連科目群は一八六〇年代から労働者階級女子を対象とした基礎学校教育に導入されていたため、学力的、社会階層的にミドルクラス女子向けのカリキュラムに相応しくないとされた。女性のたしなみ (accomplishments)<sup>③</sup> を身につけるために裁縫 (Needlework) のみが教えられ、マンチェスター女子ハイ・スクール (Manchester High School for Girls、以下 MHS) の二代目校長セーラ・A・バーストール (Sara Annie Burstall 1859-1939) が、一九〇〇年に同校で家政学 (Housewifery) コースを設置したが、イングランド女子中等教育への家庭科関連科目群の導入の嚆矢とされた。<sup>④</sup> しかし、『オックスフォード英国人名事典』のバーストールの記事が示すように、研究史では近年までこの導入を「改革世代の女性校長による厳格にアカデミックなカリキュラムの強要からの後退 (retreat)」や「フェミニスト

教育者たちが五〇年の運動によって達成してきた全てに対する裏切り (Betrayal)」と批判的に捉え、改革世代の女性校長と「女性らしさ」を追求した第二世代以降の校長の間の断絶性が強調されてきた。<sup>⑤</sup>

中央教育行政や女性校長に着目した研究が家庭科関連科目群をめぐるジェンダー・イデオロギー的な議論を強調してきたのに対し、二〇〇〇年代以降、学校史料を用いたより客観的な事例研究が進む。その結果、「改革世代の女性校長」が大学進学者モデルのカリキュラムを確立していく過程で、裁縫の他にも家庭科関連科目群がすでに導入されていたことが明らかとなり、女性校長間の断絶性を強調する研究史の理解には疑問が投げかけられている。<sup>⑥</sup> しかし、女子カレッジの卒業生のプロソポグラフィ研究 (集団的伝記研究) が進む一方、地域研究や学校内の実践に着目した研究や、女子中等学校のカリキュラムと生徒層の関連性に着目した研究はまだ十分にはなされていない。<sup>⑦</sup>

よって本稿では学校史料を用いた実証的な事例研究を行うことで、MHSでの家庭科関連科目群の導入過程や履修者の実態を明らかにする。第一に、一九世紀後半から二〇世紀初頭の女子ハイ・スクールの教育理念が「二様の責務 (double conformity)」から「分かれた目的 (divided aims)」へと変化したことを描く。第二に、MHSで家

政学コースの設立以前に行われていた家庭科関連科目群の実践内容や目的、履修者を確認する。第三に、家政学コースの教育目的や内容、履修生徒層の分析を行うことで、履修者は本当に「低学力で、社会の下層に属する生徒」や家庭に入る生徒に限定されていたのか実証的に検証し、家政学コースの需要や意義を問い直したい。分析史料には MHSG 文書館が所蔵する『学校雑誌 (School Magazine)』、『学校報告 (School Reports)』、生徒登録簿 (Register of Applications)、MHSG 校長バーストールの著作を中心に、全国女性校長協会 (Association of Head Mistresses, 一八七四年創設。以下、AHM) 史料や「ブライス委員会報告書」なども併せて用いる。

## 一・一九世紀後半から二〇世紀初頭イングランドのミドルクラス向け女子ハイ・スクールのカリキュラムの変化

この時期のイングランドのミドルクラス向け女子教育のカリキュラムは、「二様の責務 (double conformity)」と「分かれた目的 (divided aims)」という変化する教育目標を反映した。ミドルクラスの教育の目的が子女を両性の特性に合わせて社会化することにあつたため、女子は家庭でガヴァネス(女性家庭教師)から結婚に有利

となるダンス、音楽、朗読、フランス語会話等のたしなみ (accomplishments) を学んだ。しかし、専門的訓練を受けないガヴァネスの教育はしばしば皮相的であると批判され、一八五〇年代以降、男子と同等のアカデミックな教育を提供する女子中等学校が登場した。フランシス・M・バス (Frances Mary Buss 一八二七〜一八九四。校長在任一八五〇〜一八九四) が一八五〇年に創設したノース・ロンドン・コリージェイト・スクール (North London Collegiate School。以下、NLCS) は通学制女子ハイ・スクールのモデルとなり、ドロシー・ビール (Dorothea Beale 一八三一〜一九〇六) が校長を務めたチェルトナム・レディーズ・カレッジ (Cheltenham Ladies' College。一八五四年設立) は寄宿制女子パブリック・スクールのモデルとなった。

本格的な変化は一八六〇年代半ばに「トーントン委員会報告書」<sup>①</sup>がミドルクラスの教育全般―特に女子教育―の質的・量的な不備を指摘してから進んだ。一八七〇年代以降、通学制女子学校会社 (Girls Public Day School Company。GPDSG。一九〇六年より Trust に改組) や基金立学校委員会等により、バスやビールの教育理念や学校組織をモデルとする女子中等学校の数的な拡大がはかられた。<sup>②</sup>並行して教育の質の向上も目指され、一八六〇年代以降の大学地

方試験への参加、一八七〇年代以降の女子カレッジの設立や女性校長による教職訓練カレッジの支援により、専門職としての女性教師の地位や能力も向上した。一八九五年刊行の「ブライス委員会報告書」<sup>15</sup>は過去三〇年間の女子中等教育の発展を高く評価したが、この時期までには大学進学者を対象とする女子中等教育モデルが成立したのである。

男子中等教育では、一八六〇年代以降、古典教育の偏重や、科学・技術・近代外国語などのより実地的な科目の導入の有無をめぐる議論が重ねられ、学校内に古典教育と近代教育に専念する別のコースが作られるなど、生徒の進路に応じたカリキュラム再編成が行われていた。<sup>16</sup>女子教育は、教育の知的水準を上げると同時に、教師や生徒が女性性を失わない「二様の責務」あるいは「二重の目的」の追及に腐心した。まず、男子に有益な教養教育は性差を超えて女子にも有益であり、家庭内と家庭外での女性の役割と責務をまっとうするために必要な学問であるとの考えから、大学進学者を対象とした単一モデルの教養教育カリキュラムを発展させた。男子中等学校―特にパブリック・スクール―をモデルとしたカリキュラムや学校組織作り、大学地方試験や奨学金の導入、大学での学位獲得が推奨された。

しかし同時に、学校教育で女性性を維持し、追求するこ

とも喫緊の課題となり、授業料を主な収入源とした女子ハイ・スクールは特に強く影響を受けた。ミドルクラス女性の人生の目的が結婚であった時代、知的な教養教育を修めると結婚相手としての魅力が損なわれるという偏見を覆すため、女子教育者は自身のみならず教師や生徒の身だしなみや振る舞いも厳しく律した。教師と生徒が、これら対立的な目的を内面化していた点も指摘される。男性の権威への挑戦や競争はわがままで罪悪感をかきたてることであり、教職や看護等、女性の領域での能力発揮が推奨された。<sup>15</sup>また、大学進学後に教師として自活することも一般的であったため、「二様の責務」は女性らしさと職業訓練を両立させる「二重の目的 (dual aims)」<sup>16</sup>とも解釈される。

「ブライス委員会報告書」が述べるように、一八九〇年代までにはミドルクラス向け女子教育は数的・質的に発展した。カリキュラムは男子に比べて近代外国語・英文学・音楽・芸術・裁縫・体育など幅広い科目を取りそろえていた。大卒の専門職の女性教師による質の高い授業も普及し、知的な教育はミドルクラス女性が生産的で有益な生活を送るために必要不可欠であるという意識も生まれた。この間、女子中等学校で一般的に教えられた家庭科関連科目群は、裁縫のみであったと言われる。<sup>17</sup>

一八九〇年代以降、女子中等教育人口の拡大に伴い、より大衆向けの女子中等教育の導入が求められるようになった。二〇世紀初頭に社会ダーウィニズムが台頭し、国民的効率性が追求される中、女性性は家庭性 (Domesticity) を含むものとして書き換えられた<sup>18)</sup>。また、第三次産業の発展と第一次世界大戦により女性の社会進出が進み、女子中等教育が必要とされる知識や技能が変化した。大学進学を意図しない生徒数が大きく増加したことで、女子ハイスクールが提供していた人格の陶冶と将来への対応を狙った大学進学者向けの単一カリキュラムも家庭性を含むことを迫られ、進学・雇用・家庭というミドルクラス女子の多様な将来に対応する「分かれた目的」に応じたカリキュラムへと変化した。「二様の責務」が学業と女性性の追求を對置的に捉えたのに対し、「分かれた目的」は三者を鼎立させる概念と言える。しかし、両性のカリキュラムの違いや女子が男子と違って文学や芸術を得意とした点は、二〇世紀初頭にジェンダー別中等教育が強化される理由となった<sup>19)</sup>。

女性校長たちは「分かれた目的」に併せて、カリキュラムの基準となる生徒像を変化させていった。一八九八年の段階でカリキュラムの実施内容を分ける「分岐 (bifurcation)」が一部の学校では実施やむしった。NLCS

史苑 (第七八卷第一号)

二代目校長ブライアントが推奨した「分岐」は、男女に適用可能な中心的なカリキュラムを設定した上で、生徒の進路の多様性に応じて、履修科目数の差でなく履修の程度の差で多様性を持たせることだった。カリキュラムを全て履修する上位クラスが基準となり、部分的に履修する下位クラスは将来的に到達度を上げて上位クラスに統合されることが望ましいとされた。また、女子生徒の進路が厳密には「家庭を作り、社会の社会的側面を維持すること」であるため、「女子学校の事業計画は家政学と社交術 (social etiquettes) の究極的な有効性を考慮すべき」で、「最も野心的な学校においても簡単に野心を必要としないコース」が欲しいと、「専門化 (specialisation)」の必要性も指摘していた<sup>20)</sup>。

一九一〇年代までには、女性校長は大学進学者を基準とした従来のカリキュラムの限界を感じていた。AHM会長E. ウッドハウス (E. Woodhouse、名前・生没年不明) は大学進学者を基準としたカリキュラム作りが「女子の高等教育を守るためにまず不可欠だった」が、いまや「女子生徒のマジORITYがカレッジに進学しないことを忘れず、そのような生徒のために異なるカリキュラムが必要なことを注意深く考慮する必要がある」と、「非大学進学者 (‘Non-College’ girls)」を基準にするよう求めた<sup>21)</sup>。バース

トールは一九〇七年に出版された自著で「分岐」を語る際、「ラテン語や難解な数学は女子生徒の中の知的なエリートのための科目となるだろう」と、下位クラス—非大学進学者—が主流になると予測し、既に「専門化」も行っていたため、他の女性校長に先んじていたと言える。<sup>22)</sup>

カリキュラムが「分かれた目的」や非大学進学者への対応で再編成されていく中、裁縫外の家庭科関連科目群の科目は、「分かれた目的」のうち家庭に入る生徒、または「低学力で、社会の下層に属する生徒」向けの科目として導入されたといわれる。しかし、各校での導入の程度や内容にはばらつきがあった。一九〇〇年のMHSGでの家政学コースの設置は有名であるが、NLCSも一九〇四年に家事技術コース (Domestic Arts Course) を設置しており、一九〇七年までに通学制女子学校会社系列の約三〇学校中の七校が通学制技術クラス (Day Technical Class) を設置している。<sup>23)</sup> パーストールは一九〇六年のAHM大会で「各校の女性校長こそが地域の要望を最も良く判断でき」、「ハイ・スクールの理想のあり方は生徒、教師、校長がその自由と責任に貢献することである」と述べ、一九一二年の会長就任演説でも「全体的な計画による画一化こそ、我々が最も避けねばならないもの」であり、「カリキュラムの差異はそれ自体に価値があるが、我々の中等

学校内に多様な特性、権力、社会層が見られるため、特に二〇世紀イングランドで必要なものである」と述べた。校長が外部の教育行政や保護者に左右されず、学校の地域性に応じて自律的に多様なカリキュラムを組むことを理想とする考えは他の女性校長にも共有されたため、一九〇〇年代以降の家庭科関連科目群の実施の程度は学校ごとにかなりの差が見られた。

## 二. マンチエスタ女子ハイ・スクールの家政学コース 以前の家庭科関連科目群 一八七四—一八九八

一九世紀後半の女子ハイ・スクールでは、大学進学者を対象としたアカデミックな単一モデルのカリキュラムが発展したが、家庭科関連科目群としては裁縫のみが教えられたというのが研究史の共通理解であった。<sup>24)</sup> しかし、複数の学校史料を用いた最新の実証研究は、一八七一—一九一四年の間の家庭科関連科目群の実施は、三段階の異なる特徴を持つ点を指摘する。<sup>25)</sup> 第一段階は一八七〇年代から見られる「個別科目としての家庭科関連科目群」、第二段階は一八八〇年代から主に見られる「技術クラスとしての家庭科関連科目群」、第三段階は一九〇〇年代から見られる「総合コースとしての家庭科関連科目群」である。MHSGの

家政学コースは第三段階の最も早い導入例であるため、本節では第一段階、第二段階に焦点をあてて分析を行う。

MHSG はマンチェスター女性高等教育推進協会 (Manchester Association of Promoting Higher Education of Women) が母体となり、一八七四年一月一九日に共同出資型学校として開校した。創立の目的は男子と同等の知的な教養教育を女子にも提供することであった。開設当初から音楽、線描、合唱、英語、フランス語、ドイツ語、算数に加え、より高等な数学やラテン語を含む多彩なカリキュラムが設定され、大学地方試験や女子カレッジ進学も意識された。生徒が教育課程の修了時に受けたケンブリッジ大学地方試験の成績や大学進学者の奨学金の獲得状況は良好であり、大学教育を受けた古典教師や歴史教師の採用でさらに成果は上がった。一八八〇年代には科学や体育、部活動も導入された。理事会は学校経営上の採算性と教育的効果を考え、生徒数の多い大規模校を目指し、複数の専門教科を持つ教師を採用した。初代校長エリザベス・デイ (Elizabeth Day 一八四四—一九一七)。在任期間一八七三—一八九八) はロンドンの石炭請負業者の娘として生まれ、母や叔母にガヴァネスや教師が多かったことから、自身も一四歳からガヴァネスとして働きつつ勉学に励んだ。MHSG 校長となるまでにロンドンのクイーン

ズ・カレッジの認定証を獲得し、ケンブリッジ大学地方試験で優秀な成績を修めるなど、大学進学者が一般的となる以前の教師として十分な水準を持っていた。MHSG 校長に赴任した後は、一八七四年設立の AHM の立ち上げに加わるなど、在任期間を通じて女子中等教育の向上に努めた。一八九八年夏に辞職した後も MHSG や教師、卒業生に慕われた。

初代校長デイの元では、家庭科関連科目群の第一段階と第二段階が見られた。第一段階は、一八七〇年代から見られる「個別科目としての家庭科関連科目群」である。MHSG では「簡単な裁縫 (Plain Sewing)」は一八七四年の創立から一九一四年まで必修科目であり続けた。一八八一年の時間割によると、低学年の第一・二学年 (主に一二歳以下の生徒が在籍) は週一回の指導を午前に受けた。高学年 (主に一三歳以上の生徒が在籍) の第三・四学年は週二回の指導を午後を受けた。第四・五学年は「裁縫またはライティング」の授業を週一回午後を受けた。最上級生の第六学年に指導は行われなかった。一八九〇年代前半の裁縫は試験科目として学外の試験官に審査されたが、生徒の成績は丁寧な指導にもかかわらず全体として要求水準を下回り、時には「非常に悪い」とも記録された。一九〇一年代以降は裁縫の担当教師の辞職と採用が相

イングランドのミドルクラス向け女子教育と家庭科関連科目群（中込）

次ぎ、理事会小委員会が対応にあたり、家政学教師のミス・ヘンリーが一時的に裁縫教師を兼任することもあった。一九〇二年には裁縫の外部試験を取りやめ、自前のシラバスにもとづく指導を行うことが決定された。<sup>②③</sup>

また、必修外のヴォランティアな課外活動として、黄金律協会（Golden Rule Society）で慈善を目的とした裁縫活動も推奨された。黄金律協会は寄付金によって運営され、各学期に数度の集会を開き、クリスマス時期に慈善団体に寄付すべき衣類やおもちゃを作った。当初は四〇―五〇人程度の活動規模であったが、一九〇九年頃には一〇〇人を超える活動規模に拡大し、一九一三年には全校生徒に必修の活動となった。<sup>②③</sup>このように、裁縫はほぼ全校生徒が参加した必修科目であったため、履修した生徒層はMHSG全体の生徒層と一致すると考えられる。

家庭科関連科目群の導入の第二段階は、一八八〇年代から主に見られる「技術クラスとしての家庭科関連科目群」である。科学技術教育への関心の高まりを受け、一八八〇年代末から一連の技術教育法が地域ごとに技術教育委員会（Technical Education Board）を新設し、地方税を科学技術教育に利用できるようにしたことで、女子教育でも科学技術の枠内で家庭科関連科目群の導入が見られた。MHSGでは技術クラス（Technical Classes）が一八九四

〜一八九八年まで散発的に実施された。一八九三年以降、学校の経営赤字の改善策の一つとして、裁縫外の家庭科関連科目群を教える課外クラスが試験的に導入された。生徒減によって生じた空き教室を外部団体に貸し出して賃貸料や授業料収入を得るため、技術クラスで調理、婦人服仕立てと帽子製作（Dressmaking and Millinery）、速記と帳簿（Shorthand and Bookkeeping）、木工と芸術刺繍（Wood Carving and Art Needlework）を、卒業生や推薦状を準備できる女性、第五・六年年の上級生を対象に教えることが検討された。最終的に、調理、帽子製作、速記と帳簿の授業を試験的に実施することが同年三月と一〇月の理事会で可決された。一八九四年七月には翌学年度に二期にわたり婦人服仕立てと調理のクラスの開設が提案され、一〇月の理事会で可決された。調理、婦人服仕立て、帽子制作のそれぞれについて授業回数や教師の謝礼などが具体的に設定され、理事会で可決された。<sup>②③</sup>翌一八九五年一〇月の理事会ではデイが同様の授業計画を提案し、可決された。技術クラスの実施は一八九八年まで記録が残るが、バーストールの改革がはじまると同時に停止されたと考えられる。<sup>②③</sup>

空き教室の貸し出し先は、技術クラス、市内の男子中等学校マンチェスター・グラマー・スクール（Manchester

(Grammar School) の新設のプレパラトリー・スクール、近所の高等教育機関オーウェンズ・カレッジ女性部門 (Women's Department of the Owens College) と変化した。一八九七年度のカレッジへの貸し出しの際、校長デイは利用教室が重複する調理クラスを開設しないことを提案し、理事会の同意を得た。<sup>④</sup>この決定にはデイの家庭科関連科目群教育への意欲の低さが影響していた。一八九四年のブライス委員会のインタビューに際し、デイは、生徒の在籍が不安定であるのは、学校生活が生徒にとって楽しくないものになると、両親が娘を学校に通わせなくなるからだと述べた。委員会の報告書は、大規模校では生徒への個別対応が難しいことから、MHSG が生徒全体に知的教育を行っている点や、裁縫がそれを学校教育の一部と見なさない教師側と、それを希望する母親の対立を招く不快な教科であった点を指摘する。また、デイが裁縫や調理、婦人服仕立て等の科目は卒業後に学ぶべきだと発言していたことも記されている。<sup>⑤</sup>

技術クラスを履修した生徒層についての詳細な記録は残っていないが、シラバスや広告に記載された特別授業料が一科目ごとに一ギニー（実習を含む調理のみ二ギニー）であったため、比較的富裕な生徒層を対象にしていたと考えられる。

史苑（第七八巻第一号）

### 三、マンチェスター女子ハイ・スクールの家政学コース 一九〇〇—一九一四

従来の研究史は、一九〇〇年にMHSGで家政学コースが導入されたことを、女子中等教育裁縫外の家庭科関連科目群が導入された嚆矢と捉えてきた。しかし、この理解は主にバーストールの著作に依拠しており、学校史料やAHM史料を用いた実証研究の成果から考えると、MHSGでの家政学コースの導入は第三段階である「総合コースとしての家庭科関連科目群」の最も早い導入例とみるべきである。<sup>⑥</sup>

家政学コースの設立意図については、バーストール著の『学校史』と『自伝』の記述が良く知られているが、AHM史料の分析を加えることで、それをイングラッド女子中等教育全体の転換の中に位置づけることが出来る。まず、『学校史』と『自伝』では、導入は前校長デイの時代から続く生徒減による学校経営悪化への対策であったと説明される。平均的な学力レベルの生徒が一五・一六歳で早期離学する傾向から、それら生徒にとって魅力的な学校づくりを行うため、前述のようにバーストールは試験内容を見直して「分岐」・「専門化」を導入した。『学校史』ではその教育的意義が主張されるが、『自伝』では学校経営上の必要

性がより赤裸々に告白される<sup>(37)</sup>。また、一九〇六年の AHM 年大会での発言から分かるように、バーストールは校長が外部の教育行政や保護者に左右されず、学校の地域性に応じて自律的に多様なカリキュラムを組むことを理想としており、それを自身の学校でも実践した<sup>(38)</sup>。また、一九一二年の会長就任演説ではさらに、「全体的な計画による画一化」に強固に反対し、「私は全女子生徒に数学を教えることに賛成しないが、熱狂的な校長の熱意とエネルギーから生じる現実の生活に役立つ数学 (live mathematics) は、規則 (code of regulations) や両親の偏見によって押し付けられる形式的な家政術 (dead house-craft) に勝る」と断言している。研究史はバーストールをとすると強固な家庭科関連科目群の推進者と描いてきたが、一九一二年の発言からは地域の実情に即したより冷静で実際的な対策を求める人物であったことがうかがえる。

バーストールが他の女性校長に先駆けて非大学進学者向けの女子中等教育の必要性を感じていたことから、MHSG では一九〇〇年代初頭から様々なカリキュラム改革が行われた。バーストールが着任した一八九八年当時、入学者減による授業料収入の不足から MHSG 以下三校は大幅な経営赤字を抱えていた。原因は、三校が同じ理事会と財源で運営されたことや、三校間や近隣の中等学校との

間で生徒獲得競争が生じたことであった。大学進学者の数と質は安定していたものの、ロンドンに NICS と比較して平均的な生徒が一五・一六歳で早期離学するというマンチェスターの地域的な傾向も一因であった。平均的な学力レベルの生徒が夏学期末のケンブリッジ大学地方試験前に離学する傾向から、バーストールは厳格にアカデミックなカリキュラムの見直しをはかった。第一に平均的な生徒のための学校生活の充実が目指された。校長と理事会は地域の大学と MHSG との連携を強化する点で合意し、従来のケンブリッジ大学地方試験でなく、地域の大学によって実施される試験や授業視察への転換が進められた。また、団体生活の充実、ゲームや体育の導入も図られた。第二に、より実用的かつ魅力的になるようカリキュラム全体が見直された。生徒と保護者の要望を考慮し、生徒の将来にとって有用かつ実学的なカリキュラムに向けて「分岐」と「専門化」が導入された。「分岐」は NICS でも行われていたが、「専門化」はバーストール独自の着想であり、一五・一六歳以上の生徒に将来の進路に合わせた別々のコースを提供した。大学進学や公務員試験への対策や家政学、秘書訓練、または、裕福な保護者の要望にあわせて音楽や芸術のコースが想定された<sup>(39)</sup>。一九〇〇年九月開設の家政学コースは「専門化」の一部であり、「家庭に入る少女で、専門職に進む

意志のない生徒」を対象とした。続く一九〇一年九月開設の秘書コース (Secretarial Course) も、後に「非常に重要で価値ある」コースとなった。生徒は速記、簿記、スペイン語、タイピングなどの商業科目一般を学んだ。こうして「全てのタイプの少女が最善をつくせる」環境が整い、平均的な生徒の在学年数が延長されたという。<sup>④</sup>

家政学コース設置の直接の切掛は、一八九六年六月以降の MHSg の建物管理の見直しの動きであった。従来の経営赤字対策が不振に終わったため、一九〇〇年二月に建物管理と内部設備の効率化が再び議題に上った。五月には現在の婦人管理人を今年度末で解雇し、調理の授業を行える新たな婦人管理人 (lady housekeeper) を募集することが合意され、応募方法、選考方法や募集広告、応募者にもとめる条件、給与、業務内容が決定された。そして、七月の理事会で婦人管理人兼家政学教師の採用が決定された。<sup>⑤</sup>

新任の家政学教師ブランシェ・ヘンリー (Blanche Henry 一八六七〜没年不明) は一八九〇年代の先進的な家政学教育を受けていた。ヘンリーはロチェスタの私営学校で学んだ後、一八九八―一九〇〇年までロンドンのバタシー・ポリテクニク (Battersea Polytechnic) で専門的訓練を受け、調理・洗濯・婦人服仕立て・裁縫・家政学のディプロマを獲得した。一九〇〇年九月に MHSg に婦人管理

人兼家政学コース教師として採用された。一九〇八年七月に辞職した後、ロンドンのポリテクニクに再就職したと記録される。<sup>⑥</sup> 一八六〇年代以降、基礎学校で労働階級女子を対象とした裁縫、調理、洗濯などの家庭科関連科目群の教育が進む中、それを担う女性教師の育成が求められた。全国調理訓練学校 (National Training School for Cookery、一八七三年設立) のような調理学校で行われていた教師育成は、一八九〇年代以降は全国に設立された総合的・専門的なカリキュラムを提供するポリテクニクなどの専門教育機関が担うこととなった。イングランドの女子カレッジとして初めて家庭科関連科目群に特化したコースを設置したのは、ロンドン大学のキングズ・カレッジ女性部門の家政科学と社会科学コース (Household & Social Science、一九〇八年設立) であるが、女子カレッジへの進学率が非常に低かった時代、ポリテクニクなどの専門教育機関は女子が中等教育より上のレベルの教育を受ける機会を提供した。<sup>⑦</sup>

表一は MHSG での一九〇〇—一九一四年までの家政学コース名と履修人数の変化を『学校雑誌』のクラス名簿から分析したものである。一九〇〇年九月に新設された家政学 (Housewifery) コースには一七名が在籍した。家政学コースは開設

(表一)

マンチェスタ女子ハイ・スクール 家政学コース カリキュラム 1907			
一般科目	時間数	技術科目	時間数
聖書と演説	2	調理	3
英語	3	洗濯	3
歴史	2	衛生	2
フランス語	3	家事科学	2
算数	2	婦人服仕立て	2
ドイツ語 (選択)	3	家政学 (1年目) 家庭での修繕 (2年目)	2
合計	15	Total.	14

Final total 27 to 30 Periods. (Burstall, 1907, p. 199.)

から三年目まで独立した一年制コースとして運営された。一九〇五年から三年間は秘書訓練コースと統合された技術 (Technical) コースとして二クラスまたは三クラス編成となった。一九〇八年からは再び独立した家政学コースに戻り、一九一〇年からは二年制の二クラス編成に、一九一三

年には四クラス編成になった。クラス編成にともない履修人数も拡大した。家政学コースに在籍した人数の記録が残る一九〇〇—一九〇三年と一九〇八—一九一四年を比較すると、一年制コースの一クラス一七名の在籍から二年制コースの四クラス合計六八名まで約四倍にコース規模が拡大しており、着実に人気を博していったことが分かる。

このように個別のコース名は変化したが、以降の分析では全体を論じる際は「家政学コース」と総称する。また、一九〇〇—一九〇三年と一九〇八—一九一四年の家政学コースの在籍者数は『学校雑誌』のクラス名簿にはそれぞれ四四名と二二六名の名前がある。

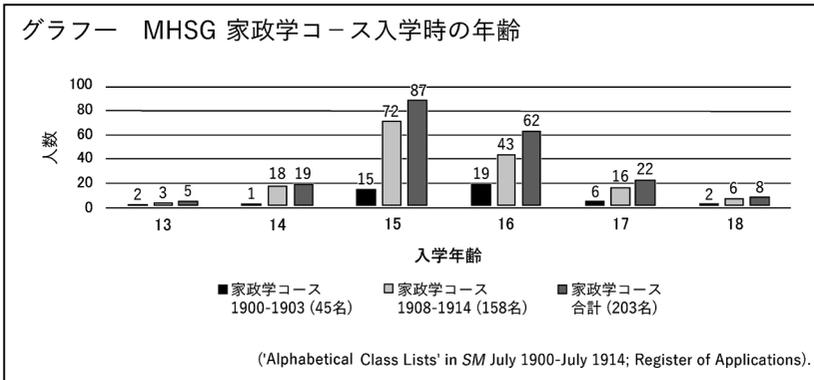
表二は一九〇六年に家政学コースが二年コースになつてからの時間割を示す。生徒は週に一五時間を一般科目「聖書、英語、歴史、フランス語、算数、ドイツ語」に、一四時間を科学的な理論に基づいた技術科目 (Technical Subjects) 「調理、洗濯、衛生、家事科学 (Domestic Science)」、婦人服仕立て、家政学／家庭での修繕 (Household Mending) に費やした。一般科目と技術科目に均等に時間を割くことで、コースが一般的な教養教育と技術教育を同じように重視していたことが分かる。一般科目に古典語が含まれない点や女子教育に特徴的な近代外国語に時間が割かれている点からは、家政学

(表二)

マンチェスター女子ハイ・スクール 家政学コース名と履修人数													
家政学	上級	初級	1年	2年	3年	4年	5年	1A	1B	技術A	技術B	技術C	
家政学	家政学	家政学	家政学	家政学	家政学	家政学	家政学	家政学	家政学	技術	技術	技術	
家政学	家政学	家政学	家政学	家政学	家政学	家政学	家政学	家政学	家政学	技術	技術	技術	
1901年7月	17												17
1902年7月	16												16
1903年7月	11												11
1904年7月	nd												
1905年7月	nd												
1906年7月										8	21		
1907年7月												8	23
1908年7月												13	7
1909年7月	15												
1910年7月	29												
1911年7月		6	22										
1912年7月				21	20								
1913年7月				31	14								
1914年7月						20	15	20	13				
													Total
													270

(‘Alphabetical Class Lists’, SM, July 1910- July 1914).

(グラフー)

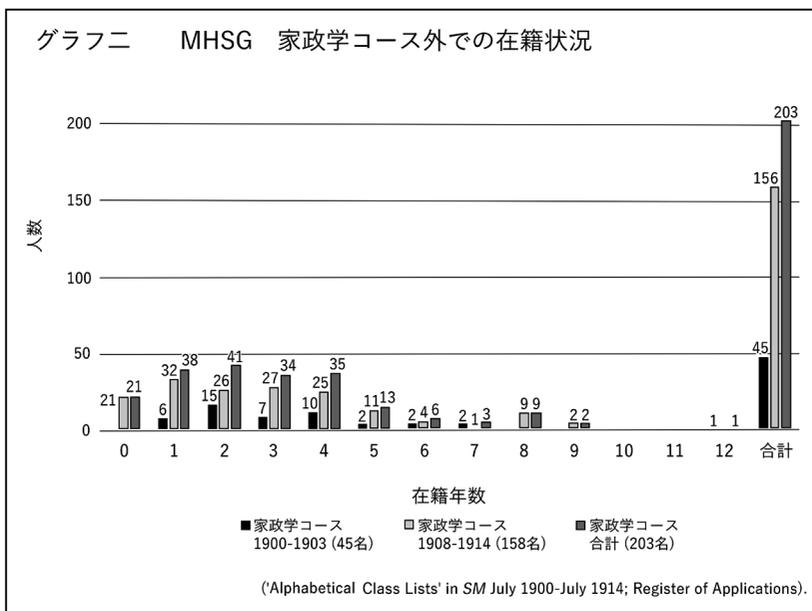


コースが非大学進学者を対象としていたことが分かる。また、技術科目にも衛生や家事科学が含まれていることから、技術科目が実践と同様に理論や知識を教えていたと推測される。

グラフーはMHSgの家政学コースに入学した時点での生徒の年齢の分布をクラス名簿と生徒登録簿から分析したものである。<sup>(45)</sup>

一九〇〇—一九〇三年については四五名分、一九〇八—一九一四年については一五八名分、両者の合計二〇三分分の記録が判明している。女性校長が一般的に家政学コースのような「専門化」は一般教養を修めた一五歳以上の生徒を対象とするのが望ましいと考えていたとおり、コース入学時の年齢は一九〇〇—一九〇三年は一六歳が一九名(全四五名中の四二%)。以降は%のみ記す)、一五歳が

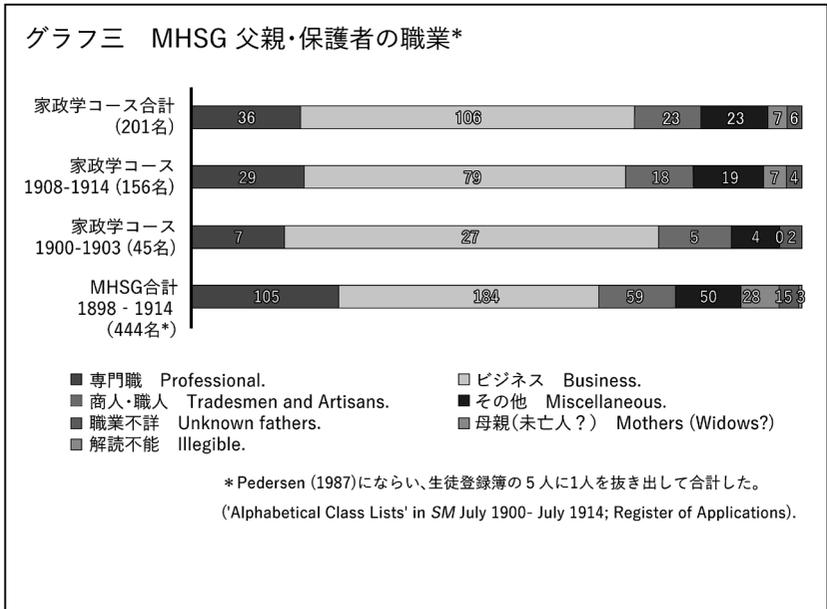
(グラフ二)



一五名（三三％）であった。同様に一九〇八―一九一四年は一五歳が七二名（全名中の四五％。以降は％のみ記す）、一六歳が四三名（二七％）で、全体として一五・一六歳での入学が目立つ。しかし、一三・一四歳での入学も見られることから、個別の生徒の状況に応じて入学年齢は変化していたと考えられる。また、一七・一八歳での入学は、対象生徒が他の女子中等学校などで一般教養を修めた後、MHSgにあらためて入学したことをうかがわせる。

グラフ二はMHSgの家政学コースに在籍した生徒が、コース入学前または終了後に何年間MHSgの他の学年やコースに在籍したかを示す。一九〇〇―一九一三年については四五名、一九〇八―一九一四年については一五六名、両者の合計二〇一名について、一年未満の在籍も切り上げて一年として計算している。一九〇〇―一九〇三年、一九〇八―一九一四年ともに、家政学コース外での在籍年数二年の一五名（三三％）と四一名（二六％）が最多であった。しかし、全体的な在籍状況は異なる。一九〇〇―一九〇三年には家政学コースのみに在籍した生徒数が〇名であったのに対して、一九〇八―一九一四年には二一名（二三％）が家政学コースのみに在籍していた。しかし、一九〇八―一九一四年には全体的にコース外の在籍年数は延びており、一年から四年の在籍が三四一名（二二

(グラフ三)



二六%) あった。また五年以上の在籍も見られる。以上から、家政学コースの新設はそれのみに在籍する新規の生徒の獲得に役立ったと同時に、既存の生徒の在籍状況も改善したことがうかがえる。

グラフ三は MHSg の生徒の父親・保護者の職業の割合を表す。家政学コースに一九〇〇—一九〇三年に在籍した生徒のうち記録が分かる四五名の割合、一九〇八—一九一四年の一五六名の割合、両者の合計二〇一名を平均した割合を分析した。また MHSg 全体の割合と比較するため、一八九八—一九一四年の学校全体の在籍者のうち五人に一人を抽出した四四四名分についても割合を記す。まず、MHSg 全体として、父親・保護者の職業がビジネス (Business) に属する生徒が四一% (全四四四名中一八四名) で最多であり、専門職 (Professional) の二四% (一〇五名) が続く。一方の家政学コースは、専門職出身の生徒の割合の割合が一八% (全二〇〇名中三六名) と学校全体の割合より低く、ビジネス出身の生徒が五三% (全二二〇名中一一六名) と高いのが特徴である。一九〇〇—一九〇三年、一九〇八—一九一四年の個別の割合を比較しても、専門職出身者が比較的少なく、ビジネス出身者が多いのは共通している。

（表三）

MHSG 家政学コース生徒の卒業後の進路 (Register of Applications.)			
	家政学コース 1900-1903 (1 名)	家政学コース 1908-1914 (123名)	合計 (124 名)
家庭			
家庭生活に入る		23	23
進学・教育			
コース修了時に認定証を獲得		47	87
家庭経済カレッジに進学		18	
音楽教育の道に進む		6	
幼児教育の道に進む		3	
フランスの学校に進学		3	
体育教育の道に進む		3	
寄宿学校に進学		3	
農業カレッジに進学		2	
芸術の道に進む		1	
大学地方試験を受験		1	
就職			
家事科教師	1		14
第一次世界大戦中の病院勤務		6	
秘書訓練・秘書として就職		4	
婦人服仕立てに就職		1	
製菓の道に進む		1	
健康訪問員となる		1	

表三が示すように、家政学コースが生徒の「分かれた目的」にどう対応していたかは、生徒登録簿に記録が残る生徒の卒業後の進路から推測することが出来る。一九〇〇—一九〇三年に家政学コースに在籍した四五名のうち、一名についてのみ家事科教師の職を得たとの記載がある。一九〇八—一九一四年に在籍した一五六名については、のべ一三三名分の記載が残る。家庭生活に入る生徒二三名に対し、進学・教育を目指した生徒は八七名、就職した生徒は一三名であり、必ずしも卒業後に家庭に入る生徒のみが在籍したコースではないことが分かった。進学・教育にかんする記録は「コース修了時に認定証を獲得」が最も多く四七名おり、MHSGの家政学コースが一定の学問水準を満たしていたことが分かる。進学先としてはリパブルやグロスター、ロンドンなどにある家庭経済カレッジ(Domestic Economy College)が一八名と最も多い。これらカレッジでは専門的な家庭科関連科目群の教師養成を行っていたことから、一定数が卒業後に教師として就職したことも考えられる。その他、音楽教育、幼児教育、体育教育、農業、芸術、フランスの学校など、進学先は多岐にわたる。就職にかんする記録は、第一次大戦中の病院勤務が六名と最も多く、秘書、婦人服仕立て、製菓、健康訪問員(Health Visitor)、家事科教師などもあった。上記の

分野は二〇世紀前半に学問分野またな職業分野として発展していき、そこでは女性を対象とした新たな専門職が確立していった。しかし、黎明期には家政学コースでの幅広い家庭科関連科目群の教育経験が生かされていたと推測される。

## おわりに

従来の研究史は、男子と同等の知的な教養教育を追求した一九世紀後半の改革世代の女性校長と、二〇世紀初頭に家庭科関連科目群を推進した第二世代以降の女性校長の間のイデオロギーや教育理念での断絶性を強調してきた。しかし、近年の研究成果は、当該期間の家庭科関連科目群の実施には連続性がありつつ、教育目的や内容にはより広い社会的な変化が反映されていたことを示す。

本稿では MHSG を対象に、一八九四—一九一四年の間の家庭科関連科目群の連続性と変化を、主に学校史料から分析した。MHSG では初代校長デイのもとで、一八七三年の創立から家庭科関連科目群の実施の第一段階「個別科目としての家庭科関連科目群」として簡単な裁縫が教えられていた。そして、一八九四年からは第二段階「技術クラ

スとしての家庭科関連科目群」として調理・婦人服仕立て・帽子製作などの家庭科関連科目群が試験的に導入されていた。二代目校長バーストールによる家政学コースの開設は、第三段階「総合コースとしての家庭科関連科目群」への移行であった。コース開設は、生徒の早期離学という地域的な修学傾向や、学校間の生徒獲得競争から引き起こされる経営赤字への対策として、全国にさがかけて非大学進学者モデルのカリキュラムを再編成する中で導入された。進学コースと家政学コース、秘書訓練コースの鼎立により、一つの学校内に生徒の「分かれた目的」——進学・家庭・就職——に応じた複線型のコースが再設定された。女子中等教育が大衆化する中、改革世代の女性校長が生徒モデルとしていた大学進学者（専門職層）ではなく、非大学進学者（ビジネス層他）の要望（イデオロギー）が学校経営に無視できない圧力を持つようになったのである。

家政学コースの履修生徒層の分析からは、履修者が「低学力で、社会の下層に属する生徒」や家庭に入る生徒に必ずしも限定されなかったことが分かった。第一に、技術クラスや家政学コースの履修者の父親・保護者の職業はビジネス層が中心であったことから、ミドルクラス内部の経済資本や文化資本の差が家政学コースの履修生徒層やその動向に関係したことが分かる。ビジネス層は経済資本こそ豊

かだが、生徒が大学進学を志さず、厳格な教養教育路線のカリキュラムに不満をもつなど、文化資本に関しては専門職層におよばなかった<sup>⑤</sup>。第二に、家政学コースの履修生徒の教育歴や進路からは、彼女たちが「非大学進学者」ではあったが、「非進学者」ではなかったことが分かる。家政学コースは「家庭に入る少女で、専門職に進む意志のない生徒」のためのコースとして開設されたが、表三が示すように、卒業後にただちに家庭にはいる生徒は二割にも満たず、より専門的な教育や職業訓練に進んだ生徒の割合のほうがはるかに高かった。家政学コースでの幅広い家庭科関連科目群の教育経験が、二〇世紀初頭には未分化であった「女性性を生かせる活動領域」——音楽教育、幼児教育、体育教育、農業、被服、芸術、製菓など——への足掛かりとなった。それは大学進学を念頭においた厳格な教養教育路線からの「後退」や「裏切り」ではなく、時代に応じて女性の教育・就業機会を拡大するための戦略であった。

本稿では学校史料を用いて学校内での実践にかんする詳細な実証分析を行ったため、生徒の進学後の女性高等教育機関や職業との関わりは不十分のまま残る。生徒の主な進学先となった家庭経済カレッジでの経験や、「女性性」が求められた領域での就職後の経験などは今後の課題である。

## 註

- (1) Hunt, 1987, pp.3-21; Hunt, 1991, Chapter 6.
- (2) Domestic subjects(家事科)は一九〇七年に出版されたメースターの著作で登場するのみである。「家庭科関連科目群」は本稿独自の用語であるが、その定義内容は以下を参考にした。中村・小林・片岡 一九九六年「九三〇一〇七頁: Turnbull, 1983.
- (3) Turnbull, 1983, pp.96-101, 111-112.
- (4) Delamont, 1978a; Delamont, 1978b; Dyhouse, 1981; Pedersen, 1987; Hunt(ed), 1987; Attar, 1991; Purvis, 1991. 滝内 一九九四年・二〇〇八年、河村 二〇〇一年、香川 二〇一五年。
- (5) Delamont, S. 'Burstall, Sara Annie (1859-1939)', in *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford University Press; online edn, May 2011.
- (6) Watson, 2000; Webber, 2009; Nakagomi, 2016.
- (7) Goodman, Jacobs, Kishy and Loader, 2011. J. Goodmanを中心とする近年のイギリス女子教育史の動向については以下を参照。グッドマン「中込・内山訳」二〇一七年「グッドマン」香川・内山・中込訳」二〇一七年。
- (8) Milburn, 1969; Summerfeld, 1987; Spener, 2000; Sperandio, 2002; Smith, 2004; Albisetti, Goodman and Rogers, 2010. Milburn と Smith は MHSG を扱っているが、家庭科関連科目群については従来の研究史の理解の枠を出ない。
- (9) Pedersen, 1975, 1987; Jacobs and Goodman, 2006.
- (10) Purvis, 1991.
- (11) 正式名称は「学校調査委員会報告書 (Reports of Schools Inquiry Commission)」である。
- (12) Kann, 1971.
- (13) 正式名称は「王立中等教育委員会報告書 (Reports of Royal Commission on Secondary Education)」である。
- (14) Hunt(1987) p.6.
- (15) Delamont, 1978a, pp.140-154; Delamont, 1978b, pp.167-177; Dyhouse, 1981, pp.66-73.
- (16) Hunt, 1987, p.8.
- (17) Turnbull, 1983, pp.96-101, 111-112.
- (18) Hunt, 1987, p.20
- (19) Hunt, 1987, pp.4-8, 12.
- (20) Bryant, 1898, pp. 99-122, 99-101; Prospectuses, Box title: Prospectuses, a2. North London Collegiate School Archive (NLCSA).
- (21) *Report 1910*, p. 23. MSS.188/4/1/3. Modern Records Centre (MRC), University of Warwick.
- (22) Burstall, 1907, p. 46.
- (23) 'No. 28. Macrae, Charlotte'. Staff, Register 1893-1924; Housewifery 1904; Cookery 1904. NLCSA.
- (24) 'Extracts from minutes made in the result of applications for grants under §42 in respect of Domestic Courses given at certain Girls' Secondary Schools.' ED 1242, The National Archive.
- (25) Turnbull (1983) pp.96-101, 111-112
- (26) Nakagomi(2016), Chapter 8. 一八七〇〜一九一四年の NLCs' 妹校のカムデン女子学校 (Camden School for Girls)' MHSG の家庭科関連科目群の実施状況、目的、担当教員、履修生徒などについての詳細な実証研究である。

- (27) 'Miss Day's Account of Her Life.' *School Magazine* (シール SM), December, 1917, Manchester High School for Girls Archive (シール MHS&GA).
- (28) 'School Course of Instructions', *School Report* (シール SR), 1874, p. 19; 'Time Tables', SR, 1881, pp. 45-51. MHS&GA.
- (29) SR 1891, 1893, 1894 and 1895. MHS&GA.
- (30) 'October 7th, 1896'; 'April 7th, 1897'; 'Sub-Committee, May 12th, 1897'; 'June 2nd, 1897'; 'May 1st, 1901'; 'November 6th'; 'December 4th, 1901'; 'July 2nd, 1902'; 'October 7th, 1896'; 'April 7th, 1897'; 'Sub-Committee, May 12th, 1897'; 'June 2nd, 1897'; 'July 22nd, 1902'. Minutes of Governors' Meetings (シール M&GM). MHS&GA.
- (31) SM, February, 1899, p.25; June, 1900, p.69; March, p.21; March, 1903, pp.33-34; December, 1909, p.59; December, 1913, p.69. MHS&GA.
- (32) 一八九四年からの授業の実施内容は以下となった。調理は第五六学年の生徒を対象に十回の実演的講義を週一回午後に行い、教師の謝礼 (fee) はコース全体で八ギニーとなる。婦人服仕立は一回一時間半の講義を二〇〜二四回実施し、教師の報酬は各回一〇シリング六ペンスである。帽子製作は婦人服仕立コースが終了した後に一〇回の短期コースとして実施し、教師の報酬は各回一〇シリング六ペンスである。 February 1<sup>st</sup>, 1893; MSC, Friday, February 10<sup>th</sup>, 1893; March 1<sup>st</sup>, 1893; October 4<sup>th</sup>, 1893; MSC, July 18<sup>th</sup>, 1894; July 18<sup>th</sup>, 1894; M&GM; October 3<sup>rd</sup>, 1894; October 2<sup>nd</sup>, 1895. MHS&GA.
- (33) SR 1894-1898. MHS&G.
- (34) 'October 7<sup>th</sup>, 1896'; 'April 7<sup>th</sup>, 1897'; 'Sub-Committee, May 12<sup>th</sup>, 1897'; 'June 2<sup>nd</sup>, 1897'. M&GM. MHS&GA.
- (35) MSC, June 27<sup>th</sup>, 1894. M&GM. MHS&GA. 'Report by Mrs. Kitchener on Secondary Education in the Hundreds of Salford and West Derby in the County of Lancashire', in *Reports of the Royal Commission on Secondary Education*, Vol.6, London: H.M.S.O., 1895, pp. 285-287, 300-301.
- (36) 雑文 中込 二〇一四年 Nakagomi, 2016 を参照。
- (37) Bursall, 1911, pp. 173-174; Bursall, 1933, pp. 145-149; 中込 二〇一四年。
- (38) *Report 1907*, p. 15. MSS.188/4/1/3. MRC.
- (39) Bursall, 1907, pp. 43-48; Bursall, 1911, pp. 165, 174; Bursall, 1933, pp. 140-151, 168.
- (40) Bursall, 1907, p.199; Bursall, 1911, p. 175; Bursall, 1933, pp. 149-151.
- (41) 'November 4<sup>th</sup>, 1896'; MSC, November 25<sup>th</sup>, 1896; 'October 6<sup>th</sup>, 1897'; MSC, October 11<sup>th</sup>, 1897; 'November 3<sup>rd</sup>, 1897'; 'February 1<sup>st</sup>, 1900'; 'March 7<sup>th</sup>, 1900'; 'May 2<sup>nd</sup>, 1900'; MSC, May 16<sup>th</sup>, 1900; 'May 23<sup>rd</sup>, 1900'; July 4<sup>th</sup>, 1900; M&GM; No. 41. Henry, Blanche', Staff Register, Vol. 1 1878-1911. MHS&GA.
- (42) No. 40. Miss Branche Henry', Staff Register I. MHS&GA.
- (43) Davin, 1978; David, 1980; Purvis, 1991; Blakestad 1994.
- (44) MHS&GA 一九〇〇年九月—一九〇一年七月までの学年の記録が一九〇一年七月の SM に記載された。 Alphabetical

- Class Lists', *SM*, July 1910- July 1914.
- (45) 'Alphabetical Class Lists', *SM* July 1900- July 1914; Register of Applications. MHS&GA.
- (46) 'Alphabetical Class Lists', *SM* July 1900- July 1914; Register of Applications. MHS&GA.
- (47) 'Alphabetical Class Lists', *SM* July 1900- July 1914; Register of Applications. MHS&GA.
- (48) 家政学コース在籍者の専門職の父親・保護者の内訳は以下の通りである。エンジニア 七名、医療 六名、聖職者 四名、政府関係者 四名、会計士・教育 各三名、法曹 二名、音楽家 二名、ジャーナリスト・軍関係者・司書・警察官・調査員 各一名。
- (49) 家政学コース在籍者のビジネスの父親・保護者の内訳は以下の通りである。貿易商・卸売商 二六名、工場経営者 一四名、エージェント 一三名、マネージャー 一一名、外交員 九名、船荷主 七名、バイヤー 五名、建築業 三名、ディーラー・株式仲買人・酒類販売免許者 各二名、競売・銀行業・運送業・建設業・出版業・料理店経営・会社監督 各一名。
- (50) Register of Applications. MHS&GA.
- (51) 女子中等教育内の特定の教育内容と文化資本の相関については、Jacobs and Goodman, 2006、\ Jacob, 2007 を参照。

#### 引用文献リスト

- Reports of the Schools Inquiry Commission*, 21 vols., London: H.M.S.O., 1867-1868
- Reports of Royal Commission on Secondary Education*, 9 vols., London: H.M.S.O., 1895.
- Albisetti, J. C., Goodman, J. and Rogers, R. (eds) (2010). *Girls' Secondary Education in the Western World: From the 18th to the 20th Century*, Basingstoke, Palgrave Macmillan.
- Attar, D. (1991). *Wasting Girls' Time: History and Politics of Home Economics*, London, Virago.
- Blakestad, N. L. (1994). 'King's College of Household & Social Science and the household science movement in English higher education c. 1908-1939'. Unpublished PhD Thesis, University of Oxford.
- Bryant, S. (1898). 'The Curriculum of a Girls' School', in *Special Reports on Educational Subjects*, London, H.M.S.O.
- Burstall, S. A. (1907). *English High Schools for Girls: Their Aims, Organization, and Management*, London, Longmans, Green.
- Burstall, S. A. (1911). *The Story of the Manchester High School for Girls, 1871-1911*, Manchester,

Manchester University Press.

Burshall, S. A. (1933). *Retrospect & Prospect: Sixty Years of Women's Education*, London, Longmans & Co.

Delamont, S. (1978a). 'The contradictions in ladies' education' in S. Delamont and L. Duffin (eds), *The Nineteenth Century Woman: Her Cultural and Physical World*, London, Croom Helme, pp.134-163.

Delamont, S. (1978b). 'The domestic ideology and women's education' in S. Delamont and L. Duffin (eds), *The Nineteenth Century Woman: Her Cultural and Physical World*, London, Croom Helme, pp.164-187.

Delamont, S. 'Burshall, Sara Annie (1859-1939)', *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford University Press, 2004; online edn, May 2011. [<http://www.oxforddnb.com/view/article/45782>, accessed 29 Nov 2013].

Dyhouse, C. (1981). *Girls Growing Up in Late Victorian and Edwardian England*, London, Boston, Routledge and K. Paul.

Goodman, J., Jacobs, A., Kishy, F., and Loader, H. (2011). 'Travelling careers: overseas migration patterns in the professional lives of women

attending Girton and Newnham before 1939', *History of Education*, 40(2), pp.179-196.

Hunt, F. (1987). 'Divided aims: the educational implications of opposing ideologies in girls' secondary schooling, 1850-1940' in F. Hunt (ed.), *Lessons for Life: The Schooling of Girls and Women, 1850-1950*, Oxford, Basil Blackwell, pp.3-21.

Hunt, F. (ed.) (1987c). *Lessons for Life: The Schooling of Girls and Women, 1850-1950*, Oxford, Basil Blackwell.

Hunt, F. (1991). *Gender and Policy in English Education: Schooling for Girls 1902-44*, Hert Jacobs, A.(2007). 'Examinations as cultural capital for the Victorian schoolgirl: "thinking" with Bourdieu', *Women's History Review*, 16(2), 245-261. fordshire, Harvester Wheatsheaf.

Jacobs, A. and Goodman, J. (2006). 'Music in the "common" life of the school: towards an aesthetic education for all in English girls' secondary schools in the interwar period', *History of Education*, 35(6), pp.669-687.

Milburn, J. (1969). 'The secondary schoolmistress: a study of her professional views and their

- significance in the educational developments of the period 1895-1914', Unpublished PhD thesis, University of London.
- Nakagomi, S. (2016). 'English middle-class girls' high schools and 'domestic subjects' 1871-1914', Unpublished PhD Thesis, UCL Institute of Education, University of London.
- Pedersen, J. S. (1975). 'Schoolmistresses and headmistresses: elites and education in nineteenth-century England'. *The Journal of British Studies*, 15(1), pp.135-162.
- Pedersen, J. S. (1987). *The Reform of Girls' Secondary and Higher Education in Victorian England: A Study of Elites and Educational Change*, New York, London, Garland Publishing.
- Purvis, J. (1991). *A History of Women's Education in England*, Buckingham, Open University Press.
- Smith, W. J. (2004). 'Manchester High School for Girls: the pioneering years, 1874-1924', Unpublished PhD thesis, University of Manchester.
- Spencer, S. (2000). 'Advice and ambition in a Girl's Public Day School: the case of Sutton High School, 1884-1924', *Women's History Review*, 9(1), pp.75-94.
- Summerfield, P. (1987). 'Cultural reproduction in the education of girls: a study of girls' secondary schooling in two Lancashire towns, 1900-50' in F. Hunt (ed.), *Lessons for Life: The Schooling of Girls and Women, 1850-1950*, Oxford, Basil Blackwell.
- Turnbull, A. (1983). 'Women, education and domesticity: a study of the domestic subjects movement 1870-1914', Unpublished PhD thesis, Polytechnic of the South Bank.
- Watson, N. (2000). *And Their Works Do Follow Them: The Story of North London Collegiate School 1850-2000*, London, James & James.
- Webber, C. (2009). 'Gendered ideologies and girls' education: a study of North London Collegiate School, c. 1870-1885', Unpublished Undergraduate Dissertation, University of Oxford.
- Yamaguchi, M. (2014). *Daughters of the Anglican Clergy: Religion, Gender and Identity in Victorian England*, London, Palgrave Macmillan.
- 香川せつ子 (二〇一五) 「ケンブリッジ大学における女性科学者の系譜——一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての時期を中心に」『西九州大学女子学芸部紀要』六号、一〜一二頁。
- 香川せつ子・河村貞枝編 (二〇〇八) 『女性と高等教育—

イングランドのミドルクラス向け女子教育と家庭科関連科目群（中込）

機会拡張と社会的相克』昭和堂。

河村貞枝（二〇〇一）『イギリス近代フェミニズム運動の歴史像』明石書店。

J・グッドマン「中込さやか・内山由理訳」（二〇一七）

『基調講演（東京セミナー）女性教育のトランスナショナルな展開と国際的ネットワーク—イギリス・アメリカ・日本—』『女性とジェンダーの歴史』五号、三〇—二三頁。

J・グッドマン「香川せつ子・内山由理・中込さやか訳」

（二〇一七）『基調講演（京都セミナー）イギリスにおける教育史研究の潮流—ジェンダー、トランスナショナルリズム、エージェンシー—』『西九州大学子ども学部紀要』八号、九三—一二二頁。

滝内大三（一九九四）『イングランド女子教育史研究』法律文化社。

滝内大三（二〇〇八）『女性・仕事・教育』晃洋書房。

中込さやか（二〇一四）『19世紀末から20世紀初頭イギリスの女子中等学校における家政学の導入—セーラー・A・バーストールの著作を再読する—』『女性とジェンダーの歴史』2号。（三〇—一四頁）

中村直人・小林久美・片岡美子「一九世紀後半から二〇世紀イギリスにおける家庭科教育史に関する一史論—女子教育制度の発展との関係を中心として—」『九州女子大学紀要』三三卷一号、一九九六年、九三—

一〇七頁。

D・K・ミユラー・ゴリンガー・B・サイモン編「望田幸男監訳・窪島務ほか訳」（一九八九）『現代教育システムの形成—構造変動と社会的再生産—』一八七〇—一九二〇頁。『国際セミナー』晃洋書房。

（本学グローバル・リベラルアーツ・プログラム運営センター特任教授）

## English middle-class girls' education and 'domestic subjects': Curriculum and Students of Manchester High School for Girls 1894-1914

NAKAGOMI, Sayaka

This article aims to examine how 'domestic subjects', variously defined as cookery, dress-making, housewifery, laundry, needlework, had changed the curriculum, and what types of pupils received instruction in Manchester High School for Girls (MHSG) between 1894 and 1914.

The literature of English middle-class girls' education from the 1850s to the early 20th century has focused on the development of academic curriculum suitable for future college girls under pioneering headmistresses, such as Miss Frances Mary Buss of the North London Collegiate School. It is well known that early female teachers and pupils had suffered from 'double conformity', namely pursuit of academic goals and maintaining femininity at the same time. 'Domestic subjects' other than Needlework were not included in the curriculum because of its link with working class girls' education from the 1860s. While the importance and popularity of middle class girls' education had been widely acknowledged by the 1890s, the pressure to promote the curriculum to be the one more attractive to 'Non-college girls', fulfilling 'divided aims', and to prepare for girls' different futures for advanced education, home life and job market, also became stronger. 'Domestic subjects' had arguably been provided to meet the needs of girls with lower academic abilities and/or lower social backgrounds within the high schools by the 1910s. The earliest case of the introduction of 'domestic subjects' was seen to be the establishment of the Housewifery Course in MHSG under its second headmistress, Miss Sara Annie Burstall, in 1900.

However, recent scholarship using school archival materials questions such understanding of the introduction of 'domestic subjects' into middle class girls' high schools. What were the specific characteristics of instruction in 'domestic subjects' such as contents, aims, staff and pupils/parents involved? Were 'domestic subjects' actually only taught to girls with lower academic ability and/or lower social backgrounds?

To solve such research questions, this article mainly examined school archival materials of MHSG to define the practice of the subjects between 1894 and 1914 under two headmistresses. In conclusion, firstly, ‘domestic subjects’ instruction in MHSG showed continuity and changes reflecting the three stages of the transformation of ‘domestic subjects’ upon its classes/courses in Plain Needlework (1874-1914), Technical Classes (1894-1898) and Housewifery Course (1900-1913). The establishment of the Housewifery Course responded to the growing needs of education for ‘non-college girls’ on school curriculum. Secondly, students involved were not necessarily limited to those aiming for home life or those with lower academic ability and/or lower social backgrounds. Students in Technical Classes& Housewifery Course mainly came from business middle classes, the social group possessing lesser cultural capital compared to professional middle classes. Such students did not enter ‘colleges’, though, many of them proceeded to higher educational institutions other than ‘colleges’ and specialist training in various fields of female employment about to be opened to women.